ハイブリッド文法

—軽動詞 *have / take* の事例—

Hybrid grammar
—A case study of the Light verbs of *have / take*—

勝部 愛美[1]
[1]大妻女子大学大学院人間文化研究科

Manami Katsube[1]
[1]Department of Human Culture Graduate School of Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：軽動詞，コーパス，直観，重複，ハイブリッド文法
Key words：Light verbs, Corpora, Intuition, Overlapping, Hybrid grammar

抄録

これまで，文構造の記述には，主に語からのアプローチと型からのアプローチが用いられてきた．しかし，これらの方法には問題も見られる．語からのアプローチの記述法は，当該の語がどのような型で用いられるのか，どのような意味で用いられるのかを示す点では優れている．しかし，他のどのような語が同じ型をとるのかはわからない．他方，型からのアプローチの場合，どのような型がどのような語に対応するのかを示す点では，優れている．しかし，その語のグループが，他にどのような型をとることができるのかは示されない．本稿では，このような問題を打破すべく，ハイブリッド文法を提案する．ハイブリッド文法は，語と型からのアプローチの利点を組み合わせた枠組みである．資料はコーパスの資料と母語話者による判定を利用する．コーパスの資料のみを利用する場合，問題がある．コーパスは豊富なデータを供給するという利点を持つ一方，文法的か非文法的かという判定はできない．ハイブリッド文法では，コーパスから抽出したデータを基に，母語話者に判定を依頼し，その結果を資料として利用する．ハイブリッド文法は，コーパスと母語話者による判定の利点を組み合わせている点でもハイブリッドである．本稿では，同じa＋ 動詞的名詞を従える軽動詞*have / take*にハイブリッド文法を適用し，その有用性を例証する．

1.　はじめに

前稿（勝部 2014)[1]においては，ハイブリッド文法の枠組みを提唱し，-ic / ical を伴う形容詞と名詞の連語に関する考察を行った．本稿では，ハイブリッド文法が形容詞と名詞という連語のみならず，軽動詞構文のような三語以上の連語からなる型への適用が可能であることを例証する．また，ハイブリッド文法を利用することで，*have / take* の特性を明らかにする．

2.　軽動詞構文

2.1.　字義的な用法との比較

本来，動詞は文の意味形成において，核となる重要な役割を担っている．一方，軽動詞（light verbs）はそれ自体にほとんど意味を持たず，後続する事象名詞が動詞句の意味の大半を表す．例えば，I *had* a drink. における *had* は字義的な意味を失い，*had* に後続する drink が意味の大半を担い，*had* a drink という連続体ひとかたまりで「飲んだ」という意味を示すこととなる．Matthews (2007)[2]によると，*take* a look における *take* などの動詞が全体に与える意味は，*take* a sandwich における *take* より特定性が低い．また，軽動詞は後続名詞に対応する動詞による言い換えが可能で，この場合ほぼ同じになるとされる．しかし，軽動詞が本来持つ字義的な意味は若干残っているという見解もあ

る．

本節では，軽動詞 *have* と *take* の本来の意味を確認し，字義的な用法と比較しながら，軽動詞の特性を説明する．OED[3]では，*have* と *take* の意味に関して以下のような記述がある．

have	「(手で) 持つ」という元の意味から「所有する」という意味に変化していき，「所有」という関係のより一般的なクラスを表現するまで拡張している．
take	初期のゲルマン言語での用法は，「手を置く」，「触る」という身体動作を表現するというものである．英語では，「つかむ，にぎる」という意味へ変化していった．さらに，身体動作でも *take* は「自身の動作や意志による移動」という要素になっている．

＜表　1＞

このように，*have* は「所有する」という意味へ，*take* は「つかむ」などの意味へ変化し，*take* の方が身体動作としての意味をより強く帯びている．この字義的な用法の *have / take* が用いられている事例を参照する．

(1)　a. I *have* a pen.
　　b. I *have* a good memory.
(2)　a. She *takes* the railing.
　　b. We *took* a bus.

(1a)の *have* は，「ペンを持っている」という中核的な意味で用いられている．(1b) の *have* は「記憶力が良い」という，主語とその属性の所有関係を表しており，「持つ」という意味が拡張したものである．(2a) の *take* は，「手すりをつかむ」という中核的な意味で用いられている．(2b) の *take* はバスを「つかむ」という意味ではなく，「自身の動作や意志による移動」という拡張した表現で用いられている．

さらに，中核的な意味からより離れた意味で用いられている例を確認する．

(3)　a. I *have* a stomach ache.
　　b. He *had* cake.
(4)　a. I *take* a picture.
　　b. We *took* a cup of tea.

(3a) は「腹痛がある」という経験の所有を表しており，主語とその経験の所有関係を示しているが，中核的意味が拡張したものである．(4a) は「つかむ」や「自身の動作や意志による移動」という中核的意味からは離れたものであるが，目に映るものを写真として取り込むという，「自身の動作や意志による移動」という意味が含意されていると考えられる．(3b, 4b) はどちらも「食べる」，「飲む」という飲食を表し，中核的意味からは離れた意味ではあるが，それぞれの意味を残している．(3b) の場合は，主語の経験として所有しているという意味で，(4b) の場合は，飲食物が主語の動作や意志で体内に移動するという意味で，体内に「取り込む」ということを表現している．

次に軽動詞構文の例を確認する．

(5)　a. I *had / took* a drink.
　　b. We *have / take* a walk.

(5a) は「飲む」という事象を表しており，その意味では (3b, 4b) と類似している．しかし，(5a) の場合，*had / took a* に後続する名詞 drink は，動詞 drink を用いることで，同じ意味の言い換えが可能である．(5b) の場合も，walk を動詞として用いることで言い換えが可能である．対応する動詞を用いた (5) を言い換えた例を以下に示す．

(6)　a. I drank.
　　b. We walk.

このように，軽動詞構文は対応する一語動詞による言い換えが可能である．先行研究においては，軽動詞構文と対応する一語動詞を用いた文は若干意味が異なるとしているものもある．対応する一語動詞では可能であるが，軽動詞構文では表現できないとされる例については，次節において適宜参照する．

2.2.　先行研究

軽動詞構文は多くの論文において取り上げられてきた．本稿では，Wierzbicka (1982)[4]，Dixon (1991)[5]，相沢 (1999)[6]を先行研究として概観する．

2.2.1.　Wierzbicka (1982)

Wierzbicka (1982)[4] は，オーストラリア英語を対象言語とし，自身の直観による意味的な分析を

行い，共起する名詞の意味によって have 構文を＜表 2＞のように分類している．

意味グループ	具体例
目的・目標がない個人の活動	walk, swim, run, jog, lie-down
知覚を目的とした活動	look, listen, smell, feel, taste
試験的な活動	try, look for, think about
半ば自発的な活動	cough, yawn, cry
ものの一部を消費する活動	bite, lick, chew, nibble
分離していないものを消費する活動	drink, smoke, sip, sniff
他の実体を巻き込む外面的な活動	kick, throw, throw, read
自己決定的な活動	wash, shave
共同で行う身体活動	kiss, cuddle, dance
共同で行う言語活動	chat, laugh, gossip

＜表　2＞

Wierzbicka は，have 構文は目的がない行為についていう場合において用いられるため，目的地を示すことはできないと主張する．

(7)　a. John *had a walk* around the town.
　　b. *John *had a walk* to the post office to post a letter.

(Wierzbicka 1982: 75)

(7a)では，目的地は特に示されていないが，(7b)では post office という目的地が明示されているため，非文だとされている．

have と *take* の違いについては，have 構文は目的がない，未計画の行為であるのに対し，*take* の場合は計画された行為だとしている．

(8)　a. **take a sleep*
　　b. *take a nap*

(ibid.: 795)

(8a) にある sleep という行為は，自分自身で制御できないが，(8b) の nap という行為は自分自身で制御可能だという理由で，(8a) は非文となるとしている．

形容詞に関する分析では，動詞的名詞を修飾する形容詞は，軽動詞の意味と合致するものであるとされる．

(9)　a. I *had a look* at all the files in just ten minutes.
　　b. * He *had a long swim* in his tiny pool.
　　c. **have a lengthy walk*.

(ibid: 757)

have 構文は，短時間で行われる行為を述べる場合に用いられるとされているため，(9a) のような例の場合には容認される一方，(9b) は long が動詞的名詞の swim を修飾している例で，長い時間泳ぐという行為は「短時間で行われる」という have 構文の意味とは異なるため，非文となるとされる．(9c) の例の場合も，長い時間歩くという行為は have 構文の意味を反映しないため，非文とされる．しかし，*have* a long walk という連続体が容認される場合もあり，それは時間が長いのではなく，空間的に長いのであり，空間的に長い場合には容認されるとしている．Wierzbicka の *have / take* の主張は以下のようにまとめることができる．

have	長時間ではなく，一時的に行われる
	他の誰かではなく主語自身に起こる何か（良い）ことを引き起こす
	目的がない
	繰り返し行われる
	時間や空間は計画されたものではない
take	主語の身体部分を動かす
	短時間で何かを知覚するため，あるいは知るために行われる
	主語自身の為に行われる
	繰り返し行われる

＜表　3＞

上記のように，have 構文と take 構文は，短時間で行われる，自身のために行われる，繰り返し行われるなど，重複する意味が多いが，Wierzbicka は *have* と *take* の違いは計画された行為を表すか否かにあるとしている．

2.2.2.　Dixon (1991)

Dixon (1991)[5]も Wierzbicka と同様にオーストラリア英語を対象とし，軽動詞 *have*, *take*, *give* の分析をしている．Dixon は対象とする軽動詞構文に形式，意味，副詞との対応，軽動詞構文の維持という 4 つの条件を課している．1 つ目の形式に関する条件は，(10) のように，さらに 3 つの条件に分けられる．

(10) a. 対応する一語動詞を用いた文と主語が同一であるということ
b. 軽動詞 (*have, take, give*) が本動詞として用いられているということ
c. 述語動詞に後続する名詞句の主要部としての，一語動詞を用いた文における動詞の基底形に不定冠詞の a / an が前置するということ

(10a) の条件の説明において，以下の例文が挙げられている．

(11) a. I *had a kick* of the ball.
b. I *kicked* the ball.
(Dixon 1991: 339)

(11a) は一語動詞を用いた文と同一の I を主語に持つため，(10a) の条件を満たす．一方，(12a) は Dixon の分類によると，軽動詞構文ではない．

(12) a. I *had a kick* from the horse.
b. The horse *kicked* me.
(ibid.: 339)

(12a) における主語は I なのに対し，それと同義である(12b) の主語は the horse である．両者の主語は一致しておらず，(10a) の条件を満たしていない．従って，(12a) は軽動詞構文ではないと主張されている．

さらに，(10c) の条件の説明において，以下の例文が示されている．

(13) a. John and Mary *had a chat* about the accident.
b. John and Mary *had a discussion* about the accident.
(ibid.: 339)

(13a) は軽動詞である *had* に動詞 *chat* と同形の名詞 chat が後続し，(10c) の条件に合致するため，軽動詞構文とされる．他方，(13b) における *discussion* は動詞の discuss の派生形であるため，軽動詞構文から排除されている．また，次の例も条件 (10c) を満たさない理由で軽動詞構文とはみなされない．

(14) a. John *had regrets* about leaving early
b. John *regretted* that he had to leave early.
(ibid.: 339)

(14a) には対応する一語動詞を使用した文である (14b) が存在するものの，(14a) における軽動詞に後続する名詞 *regrets* は複数形で用いられ，不定冠詞の a が前置していない．従って，(14a) は軽動詞構文ではないとされる．これまで見てきたように，Dixon は形式に関する厳しい制約を課し，discussion, regrets, arrive などを軽動詞構文から排除している．

2 つ目の意味に関する条件では，軽動詞構文は対応する一語動詞を用いた文と本質的に同じ意味を持つべきだと Dixon は述べている．この説明において，Dixon は以下の例文を挙げている．

(15) a. I *had / took a look* in the suitcase.
b. I *looked* in the suitcase.
(ibid.: 340)

(15a) と対応する (15b) は，本質的に意味が一致し，意味に関する条件を満たしているとして，(15a) は軽動詞構文であると記述している．しかし，以下の例文は軽動詞構文から除外されている．

(16) a. I *had a chance* to see Mary.
b. I *chanced* to see Mary.
(ibid.: 340)

(16b) は (16a) とは全く異なる意味を示すものとされている．(16a) は「メアリーに会う機会があったが，その機会を利用しなかった」という意味を表す．一方，(16b) は「偶然メアリーに会った」ということを意味し，表す意味が (16a) と異なるため，軽動詞構文ではないと Dixon は主張している．(16) は互いに異なる意味を示すことに加えて，(16a) における軽動詞の目的語である名詞 chance は定冠詞の the によって前置されることを指摘している．

(17) a. I *had the chance* to see Mary.
b. *I *had / took the look* in the suitcase.
(ibid.: 340)

(17a) のように chance は不定冠詞 a ではなく，定冠詞の the で置き換えが可能であるため，形式の

条件で挙げられている (10c) の条件を満たしていないとして，軽動詞構文ではないことを強調している．さらに，定冠詞 the は軽動詞構文においては，絶対に用いられないとして (17b) を挙げている．

3 つ目の副詞と形容詞の対応に関する条件の説明では，形容詞が名詞句の主要部へ意味的な修飾を与える方法と副詞が動詞を修飾する方法は類似しているとし，軽動詞構文に対応する一語動詞を用いた文における副詞は，軽動詞構文での形容詞に対応するとしている．

(18) a. John *had an easy climb* up the rocks.
b. John *climbed* easily up the rocks.
(ibid.: 341)

(18a) では形容詞の easy が名詞句の主要部である climb を修飾している．一方で，対応する一語動詞 climbed を用いた (18b) では，easy に接尾辞-ly を加えた副詞の easily を用いることで (18a) と同じ意味内容を表現している．(18a) における形容詞には対応する副詞を用いた文が存在するため，(10a) は軽動詞構文であるとされている．しかし，同じ形容詞を名詞に前置した形でも，次のような場合は軽動詞構文ではないと言及している．

(19) She *gave him a long scratch* on the leg.
(ibid.: 341)

(19) の long は時間の長さではなく，膝にあるかき傷の長さのことを示す．そのため，長い時間膝を掻いていたという She scratched his leg for a long time. の所有者繰り上げ構文である She scratched him on the leg for a long time.には対応しないとされている．Dixon は (19) を，動詞と同形の scratch が独立した名詞 (independent noun) として *give* と用いられている句であるとみなし，軽動詞構文から除外している．

最後に，軽動詞構文の維持に関する条件の説明では，軽動詞構文に対応する文における動詞が他動詞である場合，軽動詞構文では一語動詞の直接目的語に of を前に挿入することができるとしている．

(20) a. I *smelled* the pudding.
b. I *had a smell* of the pudding.
(ibid.: 342-343)

(20a) の smelled は他動詞で，ここでは the pudding を目的語としている．(20a) に対応する (20b) では the pudding の前に前置詞の of を挿入することで，本質的な意味を維持しているとされる．

Dixon は動詞的名詞を修飾する形容詞に関しても，厳しく制約を課しており，対応する副詞が存在しない形容詞が生起する軽動詞構文は除外している．また，Dixon は名詞が修飾を受ける形容詞について，(21)を例に挙げ，意味の対応関係について言及している．

(21) a. I *had a long walk.*
b. I *walked (for) a long distance.*
c. I *walked for a long while.*
(ibid.: 341)

Wierzbicka は軽動詞 *have* が時間的な長さを示す *long* を伴わないとしている一方で，Dixon は (21a) の例は (21b) または (21c) に対応するものとして，可能なものとして扱っている．

また，Dixon は *have* と *take* の意味に関して，「身体的努力を伴う」かが異なるとし，以下の例を挙げている．

(22) a. *take* a look at this
b. *have* a look at that
(23) a. *take* a look at that
b. *have* a look at this
(ibid.: 352)

take は身体的努力を伴うような場合に用いられるため，「あれ」を見るという意味の (22a) より，身体的努力を必要としない「これ」を見るという意味の (23a) の方が好ましいとしている．対照的に，*have* は身体的努力を伴わないため，(22b) より (23b) の方が好ましいとされる．

2.2.3.　相沢 (1999)

相沢 (1999)[6]は，小説や新聞記事などを資料とし，軽動詞 *have / take / give / make* を中心に考察をしている．相沢は Dixon や Wierzbicka とは異なり，アメリカ英語とイギリス英語を主な資料としている．相沢の評価すべき点は，譲渡不可能性 (inalienability) という観点から，目的語となる名詞の名詞性の段階性を示している点である．相沢に

よると，譲渡可能性は「主語と目的語が指すものの関係が譲渡が可能か不可能か，部分と全体の関係かという区別である」．相沢は譲渡可能なものと不可能なものの例として，以下の例を挙げている．

(24) a. She has *blue eyes*.
　　b. *She has *my / his blue eyes*.
(25) a. She has *a blue sweater.*
　　b. She has *my / his sweater*.
(相沢　1999: 191)

相沢は，「青い目」と「セーター」を比較し，「青い目」は主語の体の一部であるため，譲渡不可能であるが，「セーター」は所有が一時的な別個のものであるため，譲渡可能であるとしている．また，have 構文と譲渡可能性は関連性があるとした上で以下の例文を示している．

(26) a. I *had a walk* [*rest, swim, wash*].
　　b. I *had some doubt* [*belief, trust*] in him. / I *had great hope* [*desire, respect*] for…
(ibid.:　191-192)

これらの例は全て比喩的な所有であるが，全ての目的語は譲渡不可能であるとされる．しかし，譲渡可能性には段階性があり，それぞれの譲渡可能性の程度は異なるとされる．軽動詞構文においては，目的語の譲渡可能性が高ければ高いほど，軽動詞の意味が軽くなると述べられている．相沢は *have a drink* を例にとり，形容詞を挿入することにより，譲渡可能性の程度を表すことができることを示している．

(27) a. I *had a quick drink*. =drink quickly
　　b. I *had a cold drink*. =*drink coldly
(ibid.: 1999: 175)

(27a) は行為の様態を示しており，対応する-ly 副詞が存在する．一方で，(27b) の場合には様態ではないため，-ly 副詞による言い換えができない．このように名詞と共起する形容詞が，対応する-ly 副詞を持たない場合は名詞性が高くなるということを述べている．

相沢は軽動詞 *have / take* と共起する名詞の意味的分類も行っており，＜表 4＞のように意味内容と共起関係をまとめている．

		have	take
身体動作	口頭行為	cough	-
	動作（自身へ）	walk	stroll
	（他者へ）	-	punch
	飲食	drink	gulp
	感覚	taste	sniff
知的活動・状態		belief	-
情報伝達	（自身・相互）	debate	-
	（他者へ）	-	-
感情	（自身の）	fear	-
	（他者への）	-	-
意志	（自身）	hope	care
	（他者へ）	-	-
関係		-	-

＜表　4＞

この表における－は共起可能な名詞が存在しないことを示す．この表では名詞が大きく 6 つに分類されており，各欄に代表的な例が示されている．この表は 6 つの名詞を意味に基づき共起関係を簡潔にまとめてある点で非常にわかりやすい．

2.2.4.　評価

これまで見てきた 3 つの論文における *have* と *take* に関する分析をまとめると＜表 5＞のようになる．

	have	take
Wierzbicka	・長時間ではなく，一時的に行われる ・他の誰かではなく主語自身に起こる何か（良い）ことを引き起こす ・目的がない ・繰り返し行われる ・時間や空間は計画されたものではない	・主語の身体部分を動かす ・短時間で何かを知覚するため，あるいは知るために行われる ・主語自身の為に行われる ・繰り返し行われる
Dixon	・主語によって自発的に行われる ・心地よさをもたらすものや，楽しみにふける ・目的がない ・主語のきまぐれによって，短時間に行われる	・主語によって自発的に行われる ・たびたび前もって計画される ・主語の体の一部に身体的努力を伴う ・完結される行為の一部分 ・1 つの単位に言及する ・主語自身のために行われる
相沢	・状態を表し静的 ・習慣的 ・自分にかかわる	・意図的 ・積極的 ・計画的

＜表　5＞

Wierzbicka と Dixon の意味分析は，どちらもオーストラリア英語を対象としていることも理由として挙げられるかもしれないが，ほぼ一致している．一方で，相沢の意味分析は Wierzbicka, Dixon と比較すると異なる点が多い．相沢の *have* の「自分にかかわる」，*take* の「意図的，積極的，計画的」という意味は，Wierzbicka や Dixon の主張と類似するものであるが，*have* の「状態を表し静的，習慣的」という意味は独自の主張である．

これまで見てきた Wierzbicka, Dixon，相沢に見られる問題点を以下の表に示す．

	問題点
Wierzbicka	・＜表　2＞の dance は必ずしも共同で行う活動ではないため，この分類は妥当であるとは言えない． ・＜表　2＞の laugh は必ずしも共同で行う活動ではないため，この分類は妥当であるとは言えない．
Dixon	(22-23) にあるような，「あれ」と「これ」を見ることによって，身体的努力に差が生じるとは考え難い．
相沢	＜表　4＞のような表示の場合，*have / take a look* など共通して用いられる典型的な軽動詞構文を表示することができない．*have / take* が常に異なる名詞を目的語にとるというような誤解を与える可能性がある．

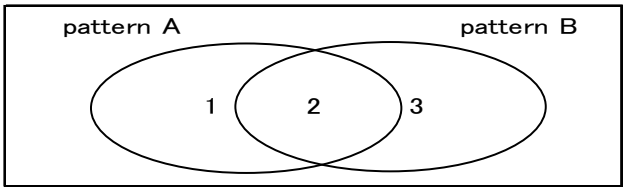
＜表　6＞

Wierzbicka は軽動詞 *have* が共起する名詞の意味分析も緻密に行い，その根拠も示しており，評価できる．しかし，方言差があるため，アメリカ英語とイギリス英語では，オーストラリア英語とは異なる結果が生じる可能性がある．アメリカ英語，イギリス英語については，軽動詞構文を Dixon や Wierzbicka ほど詳細に分析している先行研究がないため，研究の余地がある．

3.　ハイブリッド文法

3.1.　枠組み

ハイブリッド文法 (HG) は，語と型からのアプローチの利点を組み合わせ，コーパスのデータと母語話者の直観を採用した文法の枠組みである．詳細は勝部 (2014)[1] を参照されたい．HG のモデルを＜図 1＞に示す．



＜図　1＞

＜図 1＞における閉曲線の内部は, pattern A, pattern B 両方をとることができる言語要素の集合を示す．＜図 1＞の (1) に属す言語要素は pattern A のみと統合的関係にあることを示し, (3) に属す言語要素は pattern B のみと統合的関係にあることを示す．

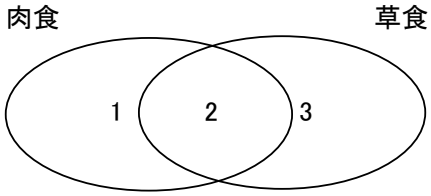
(2) に属す言語要素は pattern A かつ pattern B と統合的関係にあることを示す.

HG は, 語と型の両方を視覚的に捉えることができる．また，重複した用法を記述できるため，余剰的な記述を避けることができる．閉曲線は用いられる型を示し，その型で用いられる共起語は閉曲線内に表示される．便宜上，ベン図内には数字を示す. その数字に対応する各領域に属す成員は, ベン図下の表に表示することで，複数の成員を明示的に示す.

HG の枠組みは, 母語話者の直観とコーパスデータの利点を兼務している点でも，ハイブリッドである．母語話者の直観による判定を導入することによって, 容認度の範囲と程度を記述に組み込み, より精密なデータをベン図上に反映できる.

3.2.　アナロジー

前節で概説した HG のイメージを明確にするため，食性に基づく生物の分類を例に引こう.



	具体例
1	ライオン，オオカミ，ヒョウ
2	ブタ，ネズミ，カバ，ヒト
3	キリン，シマウマ，ウシ

＜図　2＞

＜図 2＞の成員は，哺乳類に限定している．＜図 2＞の (1) の肉食のカテゴリーの具体例としては，ライオン，オオカミなどが挙げられる．肉食の動物は動物の肉を主に摂食するという特性があり, (1) に例示された動物はこの特性を備えている. (3) の草食のカテゴリーの具体例としては, キリンやシマウマなどが挙げられる．草食の動物は植物を主に摂食するという特性があり, (3) に例示された動物はこの特性を備えている．しかし，肉食と草食の中間にある (2) のカテゴリーの具体例として挙げた，ブタ，ネズミ，カバなどは雑食性の動物である．雑食性の動物は，動物の肉も摂食し，植物も摂食するという，肉食と草食の特性を兼ね備えている.

HG は，(2) のブタ，ネズミ，カバのように，2 つのカテゴリーにまたがる言語要素をわかりやすく記述することができる枠組みである．本稿で扱う軽動詞 *have* / *take* は＜図 2＞の肉食 / 草食の関係のように，重複領域があり，重複して *have* / *take* と共起可能な名詞とそうでないものが存在する. 2 次元の図形を用いることで，非重複領域と重複領域の成員を視覚的にとらえやすくなっている. HG は，どの成員が 2 つのカテゴリーにまたがり，どの成員が一方のカテゴリーのみに属すのかということを，1 つの図面上に示すことができる.

4.　事例研究

4.1.　方法と分類

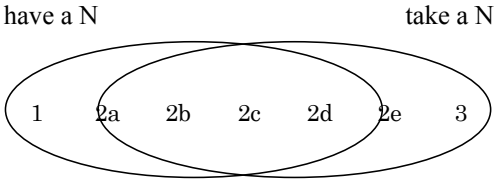
今回の軽動詞 *have* / *take* についての調査では，話し言葉，書き言葉を含む約 4 億 5 千万語のアメリカ英語のサンプルを集積した Corpus of Contemporary American English (COCA)[7] を利用した．COCA はアメリカ英語が資料であるため，資料の判定はアメリカ英語の母語話者に依頼した.

軽動詞構文の範疇は研究者によって異なるが，本稿では以下のような条件を満たす構文を軽動詞構文とし，分析を行った.

(48) a. 軽動詞 ＋a / an＋ 名詞の文型で用いられる
b. 目的語となる名詞は単音節である
c. 対応する一語動詞で言い換えが可能である
d. 主語が人間である

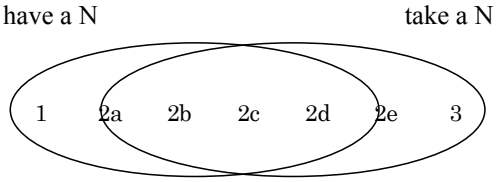
典型的な軽動詞構文は，目的語に不定冠詞を伴った単数，単音節の名詞が置かれる構文である．名詞が定冠詞をとる場合や多音節の場合，目的語の名詞性は高くなり，軽動詞構文の特性である名詞が持つ動詞性が低くなる．また，軽動詞構文で用いられる名詞は，ゼロ派生で対応する同形の動詞を持つため，同形の動詞によって言い換えが可能である．軽動詞構文は通例人を主語に置き，その活動について言及する構文であり，無生物や動物を主語にとる場合は活動の可能範囲などが人とは異なるため，本稿では研究対象としない.

今回観察された，*have* / *take* ＋a の型で共起する名詞を以下の図に示す.



		nouns
1		chat, cough, cry, dream, grin, kiss, laugh, sleep, smile, talk, yell
2	a	fight, try, touch
	b	check, wash
	c	bite, drink, drive, glance, guess, look, nap, rest, ride, sigh, sip, smell, smoke, sniff, stroll, swim, taste, walk, puff, piss, whiff, dose, shit, trek, vote
	d	kick, peep, peek, grasp, gulp, scan, stride, swig, note
	e	
3		bow

＜図　3＞



		感情	共同	放出	休息	身体活動	吸収	写像	意思表示	その他
1		grin, laugh, smile, cry, yell	chat kiss, talk	cough	dream, sleep					
2	a		fight			touch				try
	b					wash				check
	c			sigh, piss, shit	nap, rest	drive, ride, stroll, swim, walk, trek	bite, drink, glance, look, sip, smell, smoke, sniff, taste, puff, whiff, dose,		vote	guess
	d					kick, grasp, stride	peep, peek, gulp, swig	scan, note		
	e									
3									bow	

＜図　4＞

(1) に示される語は，*have a* との共起が完全に容認されるが，*take a* との共起は認められない名詞である．(2) に示される語は *have / take a* 両方との共起が容認される名詞である．(2) はさらに細分化され，重複部分の中央に位置する (2c) は両方との共起が完全に容認される名詞，(2b, 2d) にはどちらかの容認度がやや下がる名詞，曲線上に示される (2a, 2e) には，どちらかの容認度が非常に低い名詞が属す．本稿では，＜図 3＞の (1, 3) の領域を「非重複領域」，(2) の領域を「重複領域」とし，議論を進めたい．(2) に示される「重複領域」は 5 つの程度に分類される．ハイブリッド文法は母語話者による判定を利用するため，コーパスでは表示できない微妙な程度の違いを表示できる．そのため，*have / take* の用法の差異を詳細に表示できる．(1, 2c, 3) の領域は，コーパス上のデータの有無によって，おおむね表示できる．しかし，(2a-b, 2d-e) という段階性は，頻度などの差によっては明らかとならない．

この図からわかるように，*have / take a* 両方との共起が完全に容認される名詞が非常に多い．また，*have* のみとの共起が完全に容認される名詞は，*take* のみとの共起が完全に容認される例と比較すると，多いことがわかる．

さらに，＜図 2＞に示される名詞をその名詞が持つ意味から分類すると以下のように示される．*have / take* と共起する名詞を，≪感情≫，≪共同≫，≪放出≫，≪休息≫，≪身体活動≫，≪吸収≫，≪写像≫，≪意志表示≫，≪その他≫の 9 のグループに大別した．それぞれの意味グループは以下のような特性を持つ成員が分類されている．

感情	感情表現のために行われる事象.
共同	誰かと共同で行う事象.
放出	体内から何かを放出する事象.
吸収	気体・液体・視覚などを取り込むことを表す事象.
休息	身体を休めている状態を表す事象.
身体活動	身体部分，あるいは全体を動かして行う事象.
写像	文字・画像などを映すために行われる事象.
意思表示	意思表示のための活動を表す事象.
その他	上記 8 つのグループに分類できない事象.

＜表　7＞

≪その他≫の名詞については，分類が困難とされたもの分類した．≪放出≫，≪身体活動≫，≪吸収≫は雑多な成分を含有するが，次のように細分類化することができよう．

放出	気体	cough, sigh
	固体・液体	piss, shit
吸収	気体	smell, sniff, smoke, puff, whiff
	固体・液体	bite, dose, gulp, drink, taste
	視覚	glance, look, peek, peek
身体活動	移動	drive, ride, stride, stroll, swim, trek, walk
	接触	touch, wash, grasp, kick

＜表　8＞

4.2.　非重複領域

4.2.1.　have

have のみと用いられる名詞は，≪感情≫，≪共同≫，≪放出≫，≪休息≫に分類される．

感情	grin, laugh, smile, cry, yell
共同	chat, kiss, talk
放出（気体）	cough
休息	dream, sleep

＜表　9＞

≪感情≫のグループに分類される名詞は *have* とのみ共起した．これらの名詞と共起する例で，grin, laugh, smile は笑うなどの感情表現を，経験として所有するという意味の拡張であると考えられる．cry, yell の場合は，経験としての所有の意味が表れていると考えられる．これらの語は，*take* の中核的意味である「つかむ」，「自身の動作や意志による移動」という意味と合致しないため，共起しないものと思われる．

≪共同≫に分類される名詞は，2 人以上を必要とする事象を示し，経験の所有を表すと考えられる．このグループに関しても，「つかむ」「自身の動作や意志による移動」という意味とは合致しないため，共起しないと考えられる．

≪放出（気体）≫に分類されている cough は体内から気体を放出する活動を表し，これも経験としての所有を表す．この事象は，意志を持って行う活動ではないため，*take* とは共起しないと考えられる．

≪休息≫に分類される名詞に関しても，意志を持って行うものではなく，制御不可能な活動であるため，*have* のみと共起し，*take* とは共起しないと考えられる．

≪共同≫，≪放出≫，≪休息≫に分類され＜表 9＞に記されていない名詞については，次節において扱い，＜表 9＞に記される名詞との比較を行う．

4.2.2.　take

take のみと共起する名詞は，≪意志表示≫に分類される bow だけであった．bow は同じグループに分類される vote と比較すると身体動作を伴う，*take* のみと用いられると考えられる．また，bow は観客などの声援に応えてお辞儀するという意味を持つため，声援などを「取り込む」意味でも，*take* との相性が良いと思われる．

4.3.　重複領域

4.3.1.　have / ??take a N

take と共起する場合，容認度がかなり低い名詞とその分類を以下に示す．

共同	fight
身体活動（接触）	touch
その他	try

＜表　10＞

≪共同≫に属す fight 以外の名詞は，全て *have* のみと共起する．*take* と fight と共起する場合に容認度が若干上がった理由としては，chat などの活動と比較して，fight は意図的に行う活動で，意志をより伴うためだと考えられる．

≪身体活動≫にある touch は≪接触≫というグループに細分化される．touch は他の≪接触≫に分類される kick などと比較すると，身体動作は小さい．また，*take* のゲルマン語としての意味とは合致しているが，英語としての中核的意味とは合致しないため，容認度がかなり低くなると考えられる．

≪その他≫に分類される try は，「やってみる」という試験的な活動を表しており，意志性は低いと思われるため，経験を表す *have* との共起が好ましいと考えられる．

4.3.2.　have / ?take a N

take と共起する場合，容認度が少し低くなる名詞とその分類を以下に示す．

身体活動（接触）	wash
その他	check

＜表　11＞

≪身体活動　（接触）≫に分類される wash は同じグループに属す，＜表 10＞の touch と比較すると，

「(顔などを) 洗う」という活動は身体動作が大きい．そのため，touch と比較すると，身体動作の意味を強く帯びる *take* と結合した場合の容認度が若干上がるものと考えられる．しかし，kick などの動作と比較すると身体動作はより低いため，容認度が少し低くなるものと思われる．

≪その他≫に分類される check は，何かを確認しようとする意志が働くため，*take* との結合する場合の容認度が若干上がると考えられる．

4.3.3.　have / take a N

have / *take* 両方との共起が完全に認められる名詞とその分類を以下に示す．

放出	気体	sigh
	固体・液体	piss, shit
吸収	気体	smell, smoke, sniff, puff, whiff
	固体・液体	bite, drink, sip, taste, dose
	視覚	glance, look
意思表示		vote
休息		nap, rest
身体活動（移動）		drive, ride, stroll, swim, trek, walk
その他		guess

＜表　12＞

have / take は≪放出≫，≪休息≫，≪身体活動（移動）≫，≪吸収≫，≪意志表示≫に属す名詞との共起が認められた．＜表 12＞に表記のない≪放出（気体）≫と休息に分類される名詞は，＜表 9＞にある *have* とのみ共起する名詞である．≪放出（気体）≫に属す＜表 9＞の cough と比較して，sigh は息を吐き出すというだけでなく，吸い込んでから吐き出すという一連の行為を示すものであるため，*take* の中核的意味から拡張した「取り込む」という意味との結合がより好ましいと考えられる．

≪休息≫に分類される名詞に関しては，Wierzbicka と同様に，dream, sleep は制御不可能なものであるのに対し，nap, rest は制御可能で，意志を持って行う活動であるため，*take* との共起が可能であると考える．

≪身体活動（移動）≫に分類される名詞は，*take* の中核的意味である「自身の動作や意志による移動」と合致するものであるため，共起可能であると考える．*have* の場合は，移動するという活動を経験として所有するという拡張した意味で，共起が可能であると考えられる．

≪吸収≫に属す名詞は，*take* の中核的意味である「自身の動作や意志による移動」が拡張した「取り込む」という意味と合致するため，容認可能になると考えらえる．他方，*have* の場合は，経験としての所有として共起が可能であると考えらえる．

≪意思表示≫に属す vote という活動は，自身の意志を票に託すというもので，*take* の「意志による移動」という意味と合致するため，共起が可能であると考えられる．*have* の場合は，ここでも経験を所有する意味で，共起可能であると考えられる．

4.3.4.　?have / take a N

take と共起する場合，容認度が少し低くなる名詞とその分類を以下に示す．

身体活動	移動	stride
	接触	kick, grasp
吸収	固体・液体	gulp, swig
	視覚	peep, peek
写像		scan, note

＜表　13＞

≪身体活動　（移動）≫に属す stride 以外の名詞は *have* との共起が完全に認められた．stride のみ容認度が下がった理由としては，stride は大股で歩くということで，他の名詞より意志を伴う身体動作が大きい活動であることが考えられる．

≪身体活動（接触）≫に属す kick に関しても，touch, wash などと比較すると，身体動作が大きく意志を伴うため，*take* との共起がより好ましいものと考えられる．grasp に関しては，*take* の「つかむ」という字義的意味と完全に一致するため，*take* の方が好ましく用いられると考えられる．

≪吸収（固体・液体）≫に属す名詞は，＜表 12＞に示される名詞と比較すると，身体的活動が大きく，取り込もうとする意志をより必要とすることが考えられる．そのため，*take* の意味と合致し，*have* より *take* の方がより好ましく用いられると考えられる．

≪吸収（視覚）≫の場合も同様に，＜表 12＞に示される名詞と比較すると，見ようとする意志がより強いと思われる活動であるため，*take* との共起がより好ましいと考えられる．

5.　まとめと展望

本稿では，HG を軽動詞 *have / take* と名詞の結合

に適用し，分析を行った．HG を用いることで，以下のことが明らかとなった．

	動詞	名詞
have	・ OED[3]に記述された「所有する」という中核的な意味を残している． ・ *take* に比べ，意志性と身体活動性が低い．	・ *have* のみが共起する名詞は≪感情≫，≪共同≫，≪放出≫，≪休息≫を表す． ・ *take* に比べ，多くのグループに属す名詞との共起が可能である．
have / take		・ have / take 両方と共起する名詞は，≪放出≫，≪休息≫，≪身体活動≫，≪意志表示≫を表すもの． ・ 両方と共起可能な名詞は圧倒的に多い．
take	・ OED[3]に記述された「自身の動作や意志による移動」を表すという中核的な意味を残している． ・ *have* に比べ，意志性と身体活動性が高い．	・ *take* のみと共起する名詞は非常に少ない． ・ *have* に比べ，より少ないグループに属す名詞との共起が可能である． ・ ≪視覚≫の peep, peek や，≪吸収≫の gulp, swig など，同じグループに属す他の成員より，意志を伴うものや，身体活動性がより高い名詞と共起した．

＜表　14＞

have は *take* と比較して，意志性と身体活動性が低いため，≪感情≫，≪共同≫，≪放出≫，≪休息≫などの静的な名詞と好ましく用いられた．対照的に，*take* は *have* よりも意志性と身体活動性を伴うため，peep, peek のようなより意志を必要とする名詞や，gulp, swig などのより身体活動性が高い名詞とより好ましく用いられた．*have* は「経験を所有する」という意味で，所有の意味が比喩的に拡張しているが，*take* は *have* と比べ，中核的意味をより残しているため，共起する名詞の種類がより限定されていると考えられる．

しかしながら，本研究には課題が多分に残されている．今後は主に以下に示される課題について，取り組んでいきたい．

(28) a. 対応する一語動詞を用いた構文やイディオムなどとの比較を行うこと．
b. *have / take* が共起可能な名詞の予測可能性を高めるための仮説を立てること．
c. 他の軽動詞（*give*）や軽動詞と同じ動詞的名詞を目的語に置く同族目的語について，ハイブリッド文法の観点から分析を進めること．
d. 軽動詞構文と同族目的語構文に挿入される形容詞について分析を進めること．

謝辞

本稿は 2013 年 10 月 19 日に行われた大妻女子大学大学院生発表会での研究発表に一部基づいている．同発表会における研究発表に対し，貴重なコメントを下さった方々に深く感謝を申し上げます．また，研究を遂行するにあたって，多大なるご指導・ご支援を賜った指導教員の村上丘教授，データの判定をして下さった George Berninger 氏，Ken Ikeda 氏，Gail Okuma 氏には，深く感謝を申し上げます．

付録

		examples
1		(1) *Have / *Take a chat* with your dad. (2) She *has / *takes a cough*. (3) *Have / *Take a cry* and get it out of your system. (4) I *had / *took a dream* about my father recently. (5) She *has / *takes a grin*. (6) I'd rather *have / *take a kiss.* (7) They *have / *take a laugh.* (8) I need to *have / *take a sleep,…* (9) Dosk *has / *takes a smile*. (10) In the morning, we *had / *took a talk*. (11) They *had / *took a yell* for each of their players.
2	a	(1) He *had / ??took a fight* with his family. (2) Most doctors stay home when they *have / ??take a touch* of something,… (3) Let me *have / ??take a try.*
	b	(1) Let's *have / ?take a check* of the weather. (2) You better *have / ?take a wash*, Jake," Luke said.
	c	(1) They *have / take a bite.* (2) Here, *have / take a dose* of this anti-fat and get thin again (3) They *had / took a drink.* (4) I *have / take a glance.* (5) They *have / take a guess,…* (6) I *had / took a look* at it,… (7) He *had / took a nap*. (8) I said, do you know where I can *have / take a piss.* (9) My father *had / took a puff* on his cigarette and watched the ash grow longer. (10) We now *have / take a ride.* (11) She *has / takes a rest* and after that,… (12) ..., and I *had / took a sigh* of relief. (13) I *had / took a sip* of coffee. (14) You can't *have / take a shit*, Seth. (15) He *had / took a smell* of the rose. (16) I *had / took a smoke* in a sandbox,… (17) She *had / took a sniff,…* (18) He *had / took a stroll* in the public garden. (19) I often *have / take a swim* in the morning. (20) I *had / took a taste,…* (21) *Have / Take a trek* through the jungles of Borneo,… (22) A guy *has / takes a walk* in the park,… (23) Talon *had / took a whiff* of his coffee,… (24) We're going to *have / take a vote.*
	d	(1) So we each *?had / took a grasp* of the strap on his life jacket and held him back. (2) He *?had / took a gulp* of beer. (3) I *?had / took a kick* at the well-tended lawn I knew had to be there underneath the snow. (4) I'll *?have / take a note* of that. (5) *?Have /Take a peek* inside the room. (6) She *?had /took a peep*. (7) ...and the cheerful clerk doesn't just check my passport but *?has / takes a scan* of it. (8) ...Tolson *?had / took a stride* toward the box. (9) He *?had / took a swig* of whiskey.
	e	
3		He **had / took a bow* to the audience.

引用文献

[1] 勝部愛美．ハイブリッド文法の構築へ向けて．大妻レヴュー．第 47 号，2014，pp. 81-97.
[2] Matthews, P. H. *The Concise Dictionary of Linguistics (2nd edition).* Oxford University Press. 2007.
[3] Simpson, J. A. et al. (eds). *The Oxford English Dictionary (2nd edition)*. Oxford University Press. 1989.
[4] Wierzbicka, A. Why Can You Have a Drink when You Can't *Have an Eat?. *Language 58.* Linguistic Society of America. 1982. pp. 753-799.
[5] Dixon, R. M. W. *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. Oxford University Press. 1991.
[6] 相沢佳子．英語基本動詞の豊かな世界．開拓社．1999.

コーパス

[7] *The Corpus of Contemporary American English.* http://corpus.byu.edu/coca/, (accessed 2013-09-28).

Abstract

The predominant way to describe sentence structures has consisted of two approaches: from words and from patterns. These approaches, however, have several outstanding problems. Although an approach from words is better in terms of describing the meaning of a word and its co-occurrence words, it is difficult to find out other words which use the same patterns. On the other hand, although an approach from patterns is better to indicate which patterns a group of words can use, it does not express that the group of words may use other patterns. I attempt to solve these problems, by way of suggesting a third approach: *hybrid grammar*. *Hybrid grammar* is a combination between the advantage of word grammar and that of pattern grammar. I make use of both corpus data and native speaker's judgments. We can collect a great deal of data from corpora, whereas we cannot decide whether the data is grammatical / ungrammatical just because the data exists or not in corpora. Native speakers can judge that it is grammatical / ungrammatical intuitively. *Hybrid grammar* is also an amalgamation between the advantage of corpora and that of native speaker's intuition. In this paper, I apply *hybrid grammar* to *light verbs* of *have* and *take* which are followed by the same sequence of "a + *verbal noun*" so that I illustrate that it is a useful framework for description of sentence structures.

（受付日：2014 年 10 月 8 日，受理日：2014 年 10 月 17 日）

勝部　愛美（かつべ　まなみ）
現職：大妻女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程三年

大妻女子大学大学院文学研究科修士課程修了
専門は英語学．現在は主に英語の軽動詞構文に焦点をあて，研究を行っている．
主な論文：ハイブリッド文法の構築へ向けて（『大妻レヴュー』第 47 号）